

# OG訪問



今回ご紹介するのは、看護福祉学部臨床福祉学科の卒業生、江田さんです。精神保健福祉士と社会福祉士のダブルライセンスを取得し、北海道・遠軽（えんがる）町の病院で精神科ソーシャルワーカーとして活躍しています。

遠軽学田病院 精神科ソーシャルワーカー  
江田 抄穂さん（看護福祉部臨床福祉学科2006年卒業）

## ■ 広いけれど小さな町のPSW

オホーツク海から20kmほど内陸に入った、東京23区の2倍の面積に2万2400人余りが暮らす遠軽町。江田さんは本学卒業後、出身地・美幌町に近いこの町で精神科、神経科、内科をもち、精神科一般病棟に加え認知症治療病棟も有する遠軽学田病院に就職しました。4年近くの精神科病棟担当後、現在は外来と認知症治療病棟を担当し精神保健福祉士資格をもつソーシャルワーカーとして活躍中です。

同院は、愛知県ほどの広さがあるオホーツク遠軽圏域で2つしかない精神科のある病院の一つで、ソーシャルワーカーのカバーする範囲は地理的にも職務的にも広域です。「でも、広くても小さな町。協働、連携はスムーズです」。地域で生きるソーシャルワーカーとして、キャリアは丸5年を迎えます。

## ■ 聞くこと、出会うこと

江田さんはとても聞き上手です。ソーシャルワークは支援を必要とする方のために現在ある制度を駆使して複数の職種、機関をつなぐ仕事で、話を聞くことが第一歩であると考え、まさに天職といえます。

この仕事をめざした理由も、人の話を聞くのが好きだから。「高校時代、いのちの電話などで相談を受ける仕事に就きたいと言ったら、そ



外来では受診相談、初診患者さんのインテーク（診察前の面接）、制度の説明など、病棟では入院時のアナムネーゼ（既往歴や入院歴などの確認）、家族調整、療養上の相談、退院援助などを担当。月に6、7回は看護師と共に訪問看護も行います。



同院のソーシャルワーカーは江田さんを含めて2名。同室の臨床心理士1名は本学卒業生です。

れは職業じゃないと言われて…」と苦笑い。その後ソーシャルワーカー、精神保健福祉士を知り「話を聞くことが仕事になり、しかも、一見ただけではわかりづらい病気や障がいの奥にある人の尊厳、生きがいに光を当てる仕事だ」と思い、目標に定めました。

江田さんが仕事で出会う患者さんは10代から100歳過ぎまで幅広い層です。自分と同じ年代でも違う人生を生きている人、何十年も先の人生を生きている人…、たくさんの人生に耳を傾け、本人・家族の毎日がよりよい方向へ向かうよう、今日も様々な職種と協働、連携を進めています。

## ■ 大学で学んだところ、連携

「学生時代、現場で活躍中の先生からたくさん話を聞き、実習でいくつも現場を見ましたが、当時は事の偉大さが理解できていなかった



なと思います」と江田さん。現場に身を投じてから、学んだことが「新たな気づき」として自分のものになっていくのを感じています。どの先生のどの言葉、というピンポイントではなく、本学の4年間の学びで自然に福祉のこころが育っていったといいます。

もちろん思い出もたくさんです。とくに部活。4年間、大学祭実行委員会の借用課で、毎年25店以上ある出店者への物品の貸し出し、レンタル手配の調整などを手がけました。学生時代にすでに連携、協働を経験し、自身の調整能力も十分に発揮していたのです。規模の大きな学祭を運営する苦楽を共にした仲間は30名ほど。いまでも交流が続いています。

## ■ 春を招く大切な存在

「患者さんの持つ力の芽をつまない」「患者さんが決定する」ことを意識しながら仕事をする江田さん。「しんどいわーと思うこともありますが、『こうしてほしい』と自分で訴えられない患者さんの気持ちをくみ取り、様々な職種と協力し新しい方向性を示して、軌道に乗ったときの安堵感、患者さんやご家族とのつながりを思う度、この仕事から離れられないなと思います」。

オホーツク海一面を閉ざしていた流水も去り、海明けの季節を迎えました。この時期の海は栄養もひととき豊富です。たくさんの価値観、視点の中で揺れ動きながらベストの道を探す

ソーシャルワーカーは、江田さんの言う通りしんどいことも多いでしょうが、患者さんやご家族の希望をたくさん秘めた海明けのための存在なのかもしれません。

6月に行われる九十九祭ですが、大学祭実行委員会は広告集めなど1年を通して活動しています。江田さんも祭りが近くなると連日遅くまで準備に励みました。祭りの後、出店場所であるスロープの汚れをみんなでブラシを持って落としているとき、言葉にならない達成感が押し寄せてきたそう。